

言語の呪縛と解放——ワイトゲンシュタインの哲学教育——

丸山恭司

はじめに

ルートウィッヒ・ワイトゲンシュタインは二〇世紀を代表する言語哲学者である。こう言つて大きな間違いはないであろう。前世紀の哲学を特徴づける「言語論的転回」は、ワイトゲンシュタインの功績を無視して論じることができない。前期の『論理哲学論考』(以下、『論考』と略記)は人工言語学派に、後期の『哲学探究』(以下、『探究』と略記)は日常言語学派に多大な影響を与えているのである。⁽¹⁾

しかし、ワイトゲンシュタインにとって言語の哲学的探求は、彼の哲学の目的を達成するために不可欠な「手段」でしかなかった。⁽²⁾ ジョン・L・オースティンやポール・グライスのように言語哲学を専門とし、体系的理論の構築を目指していたわけではなかったのである。ワイトゲンシュタインは自らの哲学の目的を比喩的に次のように表明する。「哲学におけるあなたの目的は何か。——ハエにハエとり壺からの出口を示してやること」(PU, §306)。⁽³⁾ 言語の特定の見方に囚われた哲学者をそこから解放し

てやるのが彼の哲学の目的であり、そのために彼は言語の働きを明晰に展望して見せたのであった。

ただ、ワイトゲンシュタインは言語の呪縛からの解放が決して容易にはなされなことを了解していた。探求の帰結のみを、たとえば「語の意味はその使用である」とだけ説いて聞かせても、意味の真理対応説を奉じる者が考えを変えようとはありそうにない。それゆえ、彼は受講者や読者を呪縛から解放するために、そして、さらには彼らに自分自身を呪縛から解放する技術に教えるために、彼の授業と著作を独創的に編成したのであった。

もちろん、ワイトゲンシュタインの論じる内容を教説として理解することができないわけではない。実際に、多くの場合、ワイトゲンシュタインの哲学は新しい言語論を提起するものとして理解されてきた。そして、その際に、彼の多義的で時に矛盾する言明をどう調停するかが問題とされ、その曖昧さが批判された。しかしながら、以下で示す通り、彼が教えようとする解放の技術は、彼のテキストに織り込まれた問いと格闘して初めて習得可能な技術と考えられていたのであり、むしろ多様

な解釈を許す余地が意図的に用意されていると考えるべきである。こうした彼の哲学の目的を踏まえなければ、ワイトゲンシュタインの哲学を十全に理解したとはいえないであろう。本稿は、ワイトゲンシュタイン哲学を理解する一助として、言語の呪縛からの解放というワイトゲンシュタインの構想に着目し、ワイトゲンシュタインの哲学（教育）実践の再構成を試みる。

以下ではまず、リチャード・ローティの議論に依拠しつつワイトゲンシュタイン哲学の特性を把握する。そして、ワイトゲンシュタインが哲学（教育）を実践するにあたり、哲学の方法をどのように捉えていたのかを整理する。続いて、彼の哲学教育の具体に目を向け、解放の技倆を教えるために授業をどのように展開し、著作をどのように組み立てたのかを確認する。

教育は、それが特定のものの見方を授与する営みであるという点において、学習者に呪縛を強いる。だからこそ解放の契機がどのようなもたらされうるかは——既習の考えに固執し、異なるものに非寛容であることを是とするのではない限り——教育に携わる者にとって根本的に重要な問いであろう。本稿の考察はこの問いに答える試みでもある。

一 言語論的転回と啓発的哲学と

ワイトゲンシュタイン

ワイトゲンシュタインは言語論的転回を方向づけた重要な哲学者の一人である。今日では、「言語論的転回」は、文学や社会科学も含めた二〇世紀の思想運動を広く指す表現として用いられることも多い。しかし、もともとこの表現は、論理実証主義者に数えられるグスタフ・ベルクマンが分析哲学の隆盛をそれまでの哲学と区別するために用いたものである。ローティは分析哲学のアンソロジーを編集するに当たり、この表現をそのタイトルとして用いた⁴⁾。そして、『言語論的転回——哲学的方法の緒論』というアンソロジーが世に出されることによつて、「言語論的転回」は広く知られるようになったのであった。

「言語論的転回」を理解するうえで次の点に注意すべきである。すなわち、ベルクマンが強調し、またローティがアンソロジーに付けた副題に示されているように、転回以後の哲学者らは、言語を単に哲学の対象としたのではなく、言語を考察の対象とすることによつて——いわば、言語の考察を方法として——従来の哲学的諸問題を解決ないし解消しようとしたことである。転回以前は意識や観念を考察の対象として哲学上の問題が検討された。転回以後は言語を対象とするようになったので

ある。ワイトゲンシュタインの前期哲学も後期哲学も異なる仕方ではあるが、それぞれ言語を考察の対象とすることによって哲学的諸問題の解消を図り、転回以後の哲学を方向づけたのであった。

ローティはさらにワイトゲンシュタインの後期哲学を治療的で啓発的な哲学として高く評価している。ローティは『哲学と自然の鏡』において、哲学を体系的哲学と啓発的哲学に分け、ワイトゲンシュタインとハイデガーとデュイーを啓発的な哲学者と捉える。⁽⁵⁾「彼らの後期の著作は構築的であるよりは治療的であり、体系的であるよりは啓発的であり、読者に新たな哲学的プログラムを与えるよりは、読者をして自分自身を哲学的思索へ向かわしめている動機に疑問をもたせることに意を用いたものであった」(Rorty (1980), pp. 5-6 (序論, 一四頁))。こうした自己反省を迫る「啓発」は、さらに異なるものや新しいものに自己を出会わせることによって、自己変容を促すことになる。

ある場合には、(自分自身や他人を)啓発しようとするこの試みは、異文化や歴史的時代とわれわれ自身の文化との間に連関をつけ、また、共約不可能な語彙によって共約不可能な目的を追求しているように見える学問と、われわれ自身の学問との間に連関をつけようとする解釈学的活動である。し

かし、別の場合には、この試みは、言わば反転した解釈学が従うような新しい目的、新しい言葉、新しい学問を考え出そうとする「詩的」な活動である。つまり、これは、慣れ親しんだわれわれの周囲世界を、新たな発想による見慣れぬ用語によって再解釈をしようとする試みにほかならない。(中略) というのも、啓発的言説に要求されているのは、変則的であることであり、見慣れぬというその力によって、われわれを古い自我から連れ出し、われわれが新しい存在となるのに力を与えてくれることだからである。(Rorty (1980), p. 360 (四二〇頁))

啓発は、自己と異なるものとの間に連関を見出させ、新しいものを生み出し、さらには自己をも変革していく制作的営みである。そして、それは「読者あるいは社会全体が時代遅れとなった語彙や態度から解放される手助けをすること」(Rorty (1980), p. 12 (序論, 三〇頁))を目的とする。

ローティは後期ワイトゲンシュタインのうちに、読者を古い枠組みから解放し自己変容をもたらしことを目的とする啓発的治療的哲学者の特徴を見出している。しかしながら、ローティはさらにワイトゲンシュタインがどのようにして啓発的・治療的であろうとしたのかを明確には検討しない。むしろ彼は、デ

ヴィッド・ペアーズのウイトゲンシュタイン論を検討するなかで、ウイトゲンシュタイン研究者が——そしてウイトゲンシュタイン自身が——哲学を純粹に保とうとするがゆえに袋小路に陥つてしまつてゐると指摘する。⁽⁶⁾

他方、ヘンリー・ステータンは、ウイトゲンシュタイン研究者らがウイトゲンシュタインの哲学の意図を理解しないままテクスト解釈に拘泥していることに問題を見出している。⁽⁷⁾「彼らはウイトゲンシュタインの向こう側に行くことなくこちら側にとどまつており、彼のテクストを通過することなく済ませてしまつて」

(Spaten, p. 65 (一一三頁)) 59。

ウイトゲンシュタインを規範化してきた正統派は、ウイトゲンシュタインが感じていた「自分を哲学的理論家として考えることへの嫌悪」を、一つの迷いにすぎないとして軽んじ、他の哲学者の著作を扱ふのと同じ態度で彼の著作を扱おうとする。ウイトゲンシュタインの思想の展開をこのように捉えることは、たしかに或る意味では自由であるが、自分は他の人々を思考の病から救おうとしてゐるのではなく、彼らを自分自身で思考するように鼓舞してゐるのだ、と言う際の彼の意図からはまったく離れてしまつてゐる(同上)。

ウイトゲンシュタインが伝統的哲学の何を批判し、何をその代案として提示したのかを整理・解説すること、このことによつてウイトゲンシュタイン研究を遂行することは可能である。そうした解説が多くの読者の理解を助けてきたのも事実であろう。しかしながら、その際に研究者らが、ウイトゲンシュタインのテクストから再び「知識」「存在」「対象」「自我」「命題」「名」といった語を用いて新しい理論を抽出しようとするとき、ウイトゲンシュタインが批判した誤りを繰り返していることになつてしまふ。⁽⁸⁾

ウイトゲンシュタインの批判する側にとどまる研究者が少なからずいることをどう考えるべきだろうか。それを、ステータンに従つて、呪縛の頑強さの証左と考えることもできるだろう。あるいは、ローティに倣つて、ウイトゲンシュタインの啓発の仕方にも備があると考えられることもできよう。いずれにせよ、ウイトゲンシュタインは呪縛からの解放がただ聞き読むだけでは実行されないことをはつきりと了解していた。解放という彼の哲学の困難な目的を実現するために特別な工夫を凝らしてテキストを著したのであつた。いまや彼の哲学の具体が検討されねばならないであらう。

二 ウイトゲンシュタインの哲学の方法

1 一貫した哲学観、異なる方法

ウイトゲンシュタインは前期と後期を通じて一貫した哲学観を保持していた。たとえば、「哲学」という表現を批判されるべきものに対しても、また目指されるべきものに対しても用いていた。そのため、読者の誤解を招くことも多々あった。また、哲学を自然科学と明確に区別し、述べられた教説ではなく明確化を目指す活動であると特徴づけていた。

こうした一貫した哲学観を保持しながらも、哲学の方法に関しては前期と後期で大きく見解が異なってくる。『論考』では次のように述べられている。

六・五三 本来哲学の正しい方法は、語られること、従つて自然科学の命題、従つて哲学とは何の關係もないこと、これ以外の何も語らない、というものである。そして他の人が形而上学的なことを語ろうとする時はいつも、彼が自分の命題の或る記号に何の意味も与えていないのを、彼に指摘してやる、というものである。この方法は彼には不満足である。彼は我々が哲学を教えているという感情を抱かないで

あろう。しかしこの方法が唯一厳密に正しい方法なのである。

ここでは、哲学の正しい方法は一つであると述べられている。しかし、後期の『探究』になると、哲学の方法は一つではないと明言するようになる。「哲学の方法が一つしかない、というようなことはない、実にさまざまな方法があり、いわば異なった治療法があるのである」(PU, § 133)。また、『論考』では、哲学は語りうることのみ、すなわち、自然科学の命題のみを語り、結果として語りうることの限界を示すものとされている。一方、『探究』では、「哲学者の仕事は、一定の目的に向かつて、諸々の記憶を寄せ集めること」(PU, § 127)と述べられ、哲学は「新しい経験をもち出すことによつてではなく、とうに知られていることを整頓することによつて」(PU, § 109)問題を解決するとされる。

そもそも啓発的哲学者と呼ばれるほどに、ウイトゲンシュタインの目指す哲学のあり方は伝統的な哲学と大きく異なっている。そのため、以上のようなウイトゲンシュタイン自身の見解からは、哲学とは具体的にどのような活動であるのか想像し難いように思われる。また、哲学の方法に関する前期から後期への変化も見通し難いであろう。以下、前期と後期の哲学の方法に関するウイトゲンシュタインの見解の差を埋める作業を試み

たい。そのことによつて、彼の哲学の方法が、そして哲学の実践がより明確になるはずである。

2 「解明」としての哲学

ワイトゲンシュタインは『論考』という著作それ自体に「解明」という役割を担わせていた。⁽⁹⁾ 解明という疑似命題は、語りうることのみを語るといふ正しい哲学の方法に違反するものである。実は、『論考』は語りえないとされることを語る著作であり、そうした違反を担わされているのである。

解明の特質はゴットロープ・フレーゲから批判的に継承されたものである。フレーゲにとつて解明は、ある体系に必要となる基本語（原子記号）を導入する手段であった。定義の逆行の末に、もはや定義できない、論理的に単純な記号がある。こうした記号はより複雑な語を定義する際に用いられるものであつて、それ自体は定義できないのである。それゆゑ、自然言語によつてその意味が説明されるほかない。これが解明である。算術の体系を論理のみによつて築こうとしたフレーゲにとつて解明は望ましいものではなかつた。それゆゑ、解明は算術の体系以前に位置づけられる「予備学」のうちに生じるものとされた。

解明をこのように理解したとき、ワイトゲンシュタインがなぜ『論考』の役割を「解明」に求めたのがはつきりしてこよう。

哲学、そして『論考』自体が次のように特徴づけられているのである。

四・二二一 哲学は教説ではなく、一つの活動である。

哲学的著作は本質的に解明からなる。

哲学の結果は「哲学的諸命題」ではなく、諸命題が明晰となることである。

六・五四 私命題は、私を理解するひとがそれを通り、

それの上に立ち、それをのり越えていく時に、最後にそれが無意義であると認識することによつて、解明の役割を果たすのである。（彼は梯子をのり越えてしまつた後には、それをいわば投げ棄てねばならない。）

彼はこれらの命題を克服せねばならない。その時彼は世界を正しく見てとるだろう。

解明として語りえぬものを語ることが許されるのは、その結果として教説が残されるからではなく、活動として明晰化をもたらすことを目的としているからである。語りえぬものを語る語りは明晰化という結果をもたらした後は捨て去られねばならない。それは活動としてある場合のみ、その存在が認められるの

である。永井均は、『論考』について、「読者が『世界を正しく見る』ことを助けるための一時的な方便でしかなく、いわば教育的価値しかもたない」と言う⁽¹⁰⁾。しかし、より正確に言えば、『論考』が公表され、ひとびとに読まれることの意義は、この教育的価値にこそあったのである。

ただし、いまだ『論考』には、安易な前提があったと言わねばならない。『論考』を理解する読者は言語の誤解から解かれ、世界を正しく見て取るであろうことは疑われず、いかにして世界を「正しく」見るのか、その見方をいかに伝達するのかにについては、ほとんど顧慮されていないのである。ワイトゲンシュタインが、少なくとも哲学の問題として、これらの困難を意識した議論を展開するのは、彼がケンブリッジに復帰した一九三〇年以降のことになる。

3 「新しい方法」の発見——「展望」

G・E・ムーアによって残されたワイトゲンシュタイン講義録から判断すると、ワイトゲンシュタインが講義のなかで「新しい方法」を発見したと述べたのは一九三〇年の後半ないし一九三一年のことである。ムーアによれば、この方法は「獲得するのがきわめてむずかしい。一つの困難は、それがわれわれの慣れておらず、訓練されてもいない『たぐいの思考』——科学で要求さ

れているのとは違ったたぐいの思考——を要求する点にある。」この方法は、「単に講義を聞くだけで獲得することができない。討論が必須なのである」(ムーア、一二七頁)。ただ「かれは発見された『新しい方法』が正確にどういうものであるのか、はっきりとはわれわれに話そうとはしなかった」(同上、一一八頁)という。そもそもこの方法は、言葉による説明を聞くだけでは得られないものであり、例や比較を通して自ら考えることによつて学びうる方法であつた。ムーアは次のように報告している。

わたくしには、たしかに、かれの述べた事柄の多くが理解できなかつた。そのうえ、わたくしには、かれの用いた例や比較の驚くべき豊かさを正当に扱うことなどとてもできない。かれは、誰も知っている事柄の「共観的(シノプティック)」なみかたとみずから呼んでいたものを、本当にうまく提示していたのである。(同上、一〇頁)

ワイトゲンシュタインは授業のなかで、驚くほど豊かな例や比較を用いてシノプティックなものの見方を提示したのであつた。この「新しい方法」が「展望」を鍵概念としていたことがムーアのこの報告から推察できる。「展望」のドイツ語はÜbersichtであり、英語のシノプティックはその翻訳語の一つである。

「展望」が方法として最初に述べられたのは、ムーアが参加した授業とほぼ同時期に書かれた「フレーザー『金枝篇』について」^(U)においてである。フレーザーは『金枝篇』のなかで「未開人」の慣習に科学的説明を加えている。それらの慣習は愚直さを原因として生じているというのがフレーザーの説明であった。ワイトゲンシュタインは、フレーザーが自分にとつて身近なイギリスの生活を基準にして「未開人」の慣習を劣つたものと見なし、そうした異なるひとびとを理解しようとしないう態度を辛辣に批判する。そして、フレーザーの科学的説明に代わるものとして導入されるのが「展望」であった。展望とは、はじめ理解し難いと思えたものと、自分自身が慣れ親しんでいるものとの間に連関を見出して、理解可能とすることである。慣れ親しんだ思想考法に固執して、異なるものが受け容れられなくなっているとき、展望はその呪縛から解放してくれる一つの方法となる。

「展望」は、その着想以来、『探究』においても重要な方法として保持されている。

われわれが自分たちの語の慣用を展望していないということ、このことがわれわれの無理解の一つの源泉である。——展望のきいた叙述は理解を仲介するが、この理解はまさにわれわれが〈連関を見る〉ということにおいて成り立つのである。

それゆえ、連鎖の環を見出し、あみ出すことが大切である。
(PU, S 122)

ワイトゲンシュタインが、授業において、また著作において、例と比較を次々と示していくのも、「連鎖の環」を作り出し、理解を生み出すためである。彼の後期哲学を特徴づける「言語ゲーム」や「アスペクト転換」も、「展望」に関わる方法の一つとして展開されていったものと理解できるのである。

4 言語の呪縛を解く方法へ

ワイトゲンシュタインは前後期を通じて、言語の働きに対する誤解が解決不可能な哲学的諸問題を生じさせていると考えた。それゆえ、言語の働きを明瞭に見渡すことができれば、諸問題は解消されると見なした。言語の働きに対する誤解としてワイトゲンシュタインが批判するのは、たとえば、語の意味を指示対象物と見なす意味論を唯一のものと考え、傾向、「意味」や「命題」に本質を求め一般意味論を追究する傾向、意味のメンタリズムや規則応用図式から語の用法を説明しようとする傾向などである。語の外見の類似性のために、機能上の差異が見過ごされてしまい、背後に本質が隠されていると想定して一般化を求めてしまう傾向が批判される。

語の意味という一般的な概念が、どれほど言語のはたらきを煙霧で包みこみ、明瞭にものごとを見ることを不可能にするか。(PU, § 5)

一つの映像がわれわれを捕らえて放さなかった。そして、それからわれわれは脱出することができなかつた。なぜなら、その映像はわれわれの言語の中であり、言語はそれをわれわれに対してただ容赦なくくり返しているように思われたからである。(PU, § 115)

自分の規則にとらわれてしまっていることこそ、われわれの理解したい、すなわち展望したいことなのである。(PU, § 125)

言語の働きに関する誤解が哲学の諸問題を引き起こしている。言語の働きに関するそうした誤解は、われわれが一つの映像に強制されており、別のあり方を展望することができないことに起因している。そう考えたウイトゲンシュタインは、哲学の諸問題を解消するという彼の哲学実践を、いわば教育実践として、言語をめぐる呪縛から受講者を、読者を、そして彼自身を解放する試みと見なすことになる。続いて、彼がいかにこの教育

実践を展開していったのかを確認する。

三 ウイトゲンシュタインの哲学教育

1 哲学の授業

ウイトゲンシュタインには小学校教員の経験がある。前期と後期の間に位置づく彼の教員経験がどの程度そしてどのように後期哲学に影響を与えているのかがしばしば研究者の間で問題とされてきた。¹²⁾ 後期哲学において、教育の場面が事例として多用されているからである。ただ、ウイトゲンシュタインは、小学校教員として勤めた期間よりもさらに長い期間、ケンブリッジ大学の哲学教師であった。さらに、一九二九年にケンブリッジ哲学を再開したウイトゲンシュタインは一九三九年にはムーアの後任として哲学の教授に採用される。彼自身、復帰後まったく著作を出版していなかったにもかかわらず、である。哲学教師として彼が語ったことのみが評価されて教授に採用されたことを軽視すべきではないであろう。

哲学教師ウイトゲンシュタインの授業の様子は受講者の講義録や回想録から推し量ることができる。すでに確認したように、ムーアは一九三〇年から一九三三年にかけてウイトゲンシュタインの授業に出席した。その講義録のなかで、彼の教授スタイル

についても若干のコメントを加えている。ムーアによれば、ウィトゲンシュタインは、週に一度の講義と、その内容に関わる討論の時間を別に設けていた。討論は少なくとも二時間は続いたという（ウィトゲンシュタインが教授職を去るまでは、討論の代わりに週に二度講義を行った時期も、また、二度の講義に加え討論の時間も設けられていたこともあった）。講義においてもまた討論の際にも、ウィトゲンシュタインは黒板を頻繁に用いた。講義を聞くことだけは学びえず、討論を必要とするような内容を彼は当初から教えようとしていたのである。

ムーアの出席した復帰直後の授業からさらに年月を経て、

一九四〇年代のウィトゲンシュタインの授業の様子がかつての受講者によって回想されている⁽¹³⁾。それは、一九五一年にウィトゲンシュタインが逝去して間もなく、「記憶の新鮮なうちに、『ウィトゲンシュタインの為人と彼の教授法』という問に多少答える材料を提供」するために公表されたものである。彼らの回想にしばし耳を傾けてみよう。ウィトゲンシュタインは受講者が「面喰らう」ような授業法を展開していたのである。

毎年講義はある哲学的問題に関してであった——たとえば「他者の心」の問題や数学的命題の資格について。問題が何であれ、その年の終りまでには主な哲学的問題の殆どが直接

または暗示的に言及され解明されることになるのがウィトゲンシュタインの教授法であった。その方法は最初のうちは面喰らうものであった。例が例の上に積み重ねられた。時には例が奇抜で、ある想像上の蛮族の非常に奇妙な言語的その他の行為に関して考察を要請されることもあった。(中略)

例が周知の卑近な事実に触れることもあった。常に事例は具体的詳細な形で与えられ、身近な日常語で述べられた。話されることは殆どどれ一つをとつても容易に理解できることで、普通誰も議論などしようとは思わない種類の事柄であった。(中略)

講義を理解する際の極度の困難さは、時にはやや反復的で具体的詳細なこの話が皆何処に行き着くのか見当付け難いことに起因していた。(ガスキングとジャクソン、二五三頁)

講義では哲学の諸問題が取り上げられた。そして、その方法が特異であった。具体的で卑近な例から、奇抜で想像上の例まで、さまざまな例が与えられるという方法である。いずれの例も容易に理解できるものであった。ただ、受講者には、なぜそうした例が与えられ考えさせられるのかを理解することが困難であった。

最初のうちは話の全体が何処へ行き着くのかわからなかった。無数の例の要点がわからなかったし、わかったとしてもごく漠然とであった。それから突然それが理解できたこともあった。時々突然に問題の解決が明らかになり全てが落ち着いた。このような興奮の瞬間に人は数学者達が美しい証明について語るときに意味しているものを認識したのである。その解決は一旦理解されるとあまりに単純明白なことで、長い間叩いても開かなかつた多くの扉を開く必然的かつ容易な鍵のように思われた。人はそんなことを何故見落とす筈があるうかと首を傾げた。しかしそれを未だ理解していない人に説明する段になると、全部の長い長い道程を辿らずにはそれを理解させ得なかつたのである。(同上、二五四頁)

一度理解してしまうとあまりに簡単に思えることを、いざ別のひとに説明し理解してもらうためには長いプロセスをたどつてもらうしかないもの、そうしたことが例とともに示され教えられたのである。「扉」の例として、ウイトゲンシュタインは次の例を好んで用いていた。あるひとが外に出ようと目の前にあるいくつかの扉を開けようとする。しかしいづれにもせもの扉を外にでることができない。正しい扉は背後にあり、振り向いてそれを開ければ外に出られるのである。「彼が部屋から出るの

を助けるために我々が為すべき唯一のことは、彼に別の方向を向かせてやることだ。しかしそれをすることは難しい。というのは彼は外に出たい一心で、出口があると信じ込んでいる場所から彼の目を逸らせようとする我々の努力に抵抗するからである」(同上、二五四―五頁)。ハエにハエとり壺からの出口を示してやるというウイトゲンシュタインの哲学の目的は決して容易には遂行されないのである。

ウイトゲンシュタインは哲学的問に対する如何なる解答も、人が求めているときに与えられなければ無益であるという考えをもっていた。(中略)彼は自然の順序で技巧を凝らさずに問題を探究し解決しようとしたのであり、その方法に依れば自ら思索をする全く誠実な人間ならば誰でも問題の解決を得る筈である。(中略)この理念が著作という形で実現されるか否かは、多数の見解はあるが未だ未知である。仮にそれが可能だとしてもその著作が我々が哲学的著作と考えるものになるか否かには議論の余地がある。(同上、二五五頁)

ウイトゲンシュタインにとって、哲学はそれを必要とするひとにのみ適用されるべきものである。このことは、薬が治療を必要とするひとにのみ用いられるべきことと類比的である。哲学は

自らの言語の呪縛が異なる用法と競合するとき必要とされ、その呪縛から解かれたときに不要となる。哲学にとって健全なのは、それを止めたいときにいつでも止められることである (PU, § 133)。

引用においてガスキングらが敢えて「自然の順序で技巧を凝らさず」と述べていることに若干の解説を加えたい。彼らの念頭にあるのは、オックスフォードの言語哲学者らが、「哲学者というより言語学者」として、自然な流れに沿わず、状況を「予め用意された言語的器に」埋め込んで考察を進めていたことと対比する意図があったからである。そして、この「自然の順序」は、『探究』を編成するための基本原理でもあった。

ガスキングらの回想録が書かれた一九五二年の時点では、『探究』はまだ出版されていなかった。彼らが示唆しているように、ワイトゲンシュタインが「この理念」を著作という形でまとめようとしていたことはすでに知られていたかもしれない。ただ、ワイトゲンシュタインはこの著作を生前のうちに出版することとはしなかった。それゆえ、「この理念」が遺稿として出版された『探究』にどこまで反映されているのかは、確かに議論の余地はあるかもしれない。彼は自分の哲学が誤解されて広まることを極度に恐れ著作の出版を熱望していた。一九三六年から一九四九年までの長きにわたり、彼は何度も書き換え、出版社

との契約も取り付け、序文を二度書き、異なるヴァージョンまで作りながら、遂に満足することがなかったのである。

2 哲学のテキスト

(1) 『論考』の読者と『探究』の読者

ワイトゲンシュタインの代表的著作である『論考』も『探究』も読者を強く意識して書かれた著作である。『論考』の序文は次の言葉で始まる。

この書物を理解してくれるのは、あるいは、自分でここに表現されている思想ないしそれに類似した思想をかつて既に考えたことのある人々だけかもしれない。従ってこの書物は教科書ではない。理解ある読者を一人でも喜ばせることができたなら、この書物の目的は達せられるであろう。(p.23 (二五頁))

「教科書」とは、誰にでもわかりやすく書かれた書物の謂いであろう。理解され難いことを意識しながらも、『論考』は読者の成長に資するものとして書かれた。既に見たように、『論考』には「解明」の役割が与えられていた。『論考』は読者に理解された後は乗り越えられ、無意義なものとして捨て去られるべ

きものと性格づけられているのである。『論考』の意義は読者に対する教育的価値にこそあった。

一方の『探究』の序文には、次のように述べられている。

わたくしは、自分の手稿によって他の人が〔みずから〕考える労を省くようになるのを望まない。できることなら、誰かが自分自身で考えるための励ましになりたいと思つている。

(Vorwort (十一頁))

『探究』もまた、読者の成長に資するものとして書かれた。読者が『探究』を読み通すことによつて、自ら考え、呪縛から解放されることが目指されていたのである。実は、『探究』は教科書として構想されていた。いわゆる「戦前版」のために準備された序文には次のように書かれているのである。「この著作を教科書と呼ぶことができるかもしれない。ただし、知識を供与する教科書ではなく、思考を刺激する教科書である。」⁽¹⁹⁾『探究』は読者に例を示し、問いを發し、考えることを要求する、いわゆるワークブックないし問題集として構想されているのである。ウィトゲンシュタインの授業の回想録を著したガスキングらは、授業においても同様に、受講者に考えることが求められたと述懐している。

真剣に哲学を学ぼうとする者は誰でも歓迎された。そして我々は懸命に考えなくてはならなかったのであるが、ウィトゲンシュタインも途方もなく懸命に考えたのである。講義がその都度入念に準備されたのは明らかである——その大局の方針が計画され、無数の例が考案された。しかし講義に於て彼はその全ての例を口頭で思索し直した。教室に居る人間は時折簡単に發言したが、通常は提出された何らかの問に対して答えるためであつた。(ガスキングとジャクソン、二五四頁)

『探究』も、授業と同様に、さまざまな例と問いから構成されている。さらにその詳細に立ち入つて検討しよう。

(2) 『探究』の読み方——断章と対話

『探究』は、ウィトゲンシュタインの他の多くの著作同様、遺稿である。しかし、その完成度において他の著作とは決定的に異なる点に注意しなくてはならない。とりわけ、『探究』第一部の前半は、一九三六年以来検討が加えられ一九三七年と一九四五年の二度にわたつて序文が準備されている。ウィトゲンシュタインがさらによりよいものを求めなければ、生前に出版されたであろう内容なのである。完成度という意味では『論考』

に近いであろう。

ワイトゲンシュタインが断章のスタイルを採用している点にも注意が必要である。彼が膨大な草稿を残すことになったのも彼のこのスタイルに困る点が大きい。彼は多くの場合日付とともにノートに着想を記し、そのなかから使えそうなものを選んでタイプ原稿にした。さらに、それらのタイプ原稿を切り分けて、並べ替えながら一つの流れを作っていた。これらの手書きノートやタイプ原稿やそれらの断片が遺稿として残され、遺稿管理者らによつて出版されてきたのである。それゆえ、同じ断章スタイルでありながらも、『探究』とそれ以外の遺稿著作を単純に同等のものとして扱うことはできないのである。『探究』の英訳者であり、直弟子の一人でもあるG・E・M・アンスコムが警告しているように、『探究』がたとえ断章のスタイルをとっているからといって、それぞれの断章を独立して読むべきではなく、そのつながり方が重要なのである。読者が自ら考えることを促され、呪縛から解放されるように、『探究』の断章は自然の順序で配列されていないならなかったのである。

断章は、ワイトゲンシュタインが描くさまざまな例、仮想対話者とのやり取り、ワイトゲンシュタインの自問・解説ならびに主張から構成されている。提示された例は、読者の理解が進むにつれて、断章ごとに変奏曲のように少しずつアレンジされ

変型されていく。その間に、ワイトゲンシュタインと仮想対話者とのやり取りやワイトゲンシュタイン自身の解説が挿入される。

『探究』に現れる対話は、プラトンによつて再現される対話とは大きく異なっている。『探究』の場合、発話者が誰であるのかはつきりと指定されていないのである。時にはダツシュによつて時には引用符によつて問いや反応が括られ、そこに複数の立場が織り込まれていることが明示されている。ただ、そのうちどれがワイトゲンシュタインのもので、どれが仮想対話者のものなのかはつきりしない場合がある。読者は自分自身をこの対話に重ね、自分の言語観が進んでいく対話のうちのどちらに与するものであるのかを確認しながら読み進めなくてはならなくなる。⁽¹⁶⁾多くの問いが立てられ、そのうちほとんどは、答えられないまま断章は進んでいく。なぜならこれらの問いは読者自身が答えながら先に進むべきものだからである。

『探究』はテクストとして不完全である。『探究』は体系的に知識を供与する教科書として書かれてはいない。それは、読者に読まれ、問いに答えられることによつて補完されることが期待されている。いわば、そうした余地を意図的に残された、教育的価値に重きを置いたテクストブックなのである。『探究』をどのように読もうとそれは読者の自由であろう。しかし、『探究』を理解するために著者の意図に従つて読もうとする場合、読者

にはそうした関与が要請されているのである。

おわりに——ワイトゲンシュタインを超えて

現在手に入れることのできるワイトゲンシュタインの著作のほとんどが、遺稿管理者によつて手が加えられ出版されたものである。膨大な草稿から、哲学に関係ないメモ書きが抜き出されて、独文では『雑多のコメント』、英訳では『文化と価値』、邦訳では『反哲学的断章』として出版された。この著作には次の断章が収められている。

授業のあいだにすぐれた成果を、それどころか驚くべき成果をもたらす力があつても、それだけで、すぐれた先生だとは言えない。というのも生徒たちは、じかに教えてもらつてゐるあいだ、生来そなわつてゐる以上の能力を引き出してもらうとしても、自力をつけてその高さまで伸びたわけではないので、先生が教室からいなくなると、たちまち化けの皮が剥がれてしまうからだ。⁽¹⁷⁾

本稿で確認したように、ワイトゲンシュタインは、授業においてもまた著作においても、受講者と読者を言語の呪縛から解放

しようと試みた。彼は、それが容易でないことを理解していた。この引用でも述べられているように、たとえ授業のなかでうまくいつていても、教室を離れ、自らを呪縛から解放する技倆を駆使することができかどうかは分からないことである。ワイトゲンシュタインは、まさに受講者をそして読者を独り立ちできるところまで導こうと試みたのであつた。

ワイトゲンシュタインにとつて、独り立ちできることは根本的に重要である。前期の場合、読者は一度『論考』によつて解放されれば、それで世界を正しく見ることができると想定されていた。しかし、後期の場合、一つの呪縛からの解放は完全な自由を意味しない。むしろ、次の呪縛に囚われることになるのである。だからこそ、単に解放されることではなく、解放の技倆を習得し、哲学が必要となるとき（他者との間に葛藤が生じたとき）にはいつでも自らを古い呪縛から解放できることが決定的に重要なのである。

さて、われわれが一読者として『探究』を読むとき、『論考』を乗り越えるようにして、『探究』を乗り越えることが期待されている。ワイトゲンシュタインと対話しながら、最後には呪縛から自らを解放する技倆を得て、彼を不要とする地点に到達することが求められているのである。その際に、われわれには、自らが固執する映像——それは、これまでの教育によつてもた

らされた映像であろう——を相対化することが求められることになる。『探究』は意味の一般論を論じるべく書かれた著作ではなく——その試みがうまくいくように編成されているかどうかは別にしても——読者に態度変容を求める著作として著されたものであることが理解されなくてはならぬだろう。

註

- (1) Ludwig Wittgenstein, *Tractatus Logico-Philosophicus* (London: Routledge, 1961 (1922)). (ルートウィッヒ・ウイトゲンシュタイン(奥雅博訳)「論理哲学論考」『ウイトゲンシュタイン全集1』大修館書店、一九七五年。)
- (2) Ludwig Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, 2nd ed. (Oxford: Blackwell, 1997(1953)). (ルートウィッヒ・ウイトゲンシュタイン(藤本隆志訳)『ウイトゲンシュタイン全集8: 哲学探究』大修館書店、一九七六年。)
- (3) たとえば、G・E・ムーアの報告。G・E・ムーア(藤本隆志訳)「ウイトゲンシュタインの講義一九三〇—三三年」『ウイトゲンシュタイン全集10』大修館書店、一九七七年、一一頁、一一九頁。
- (4) Richard M. Rorty (ed.), *The Linguistic Turn: Essays in Philosophical Method with Two Retrospective Essays* (Chicago: The University of Chicago Press, 1992 (1967)), pp.8-9.
- (5) Richard Rorty, *Philosophy and the Mirror of Nature* (Oxford: Blackwell, 1980 (1979)). (リチャード・ローティ(野家啓一監訳)『哲学と自然の鏡』産業図書、一九九三年。)
- (6) リチャード・ローティ(浜日出夫訳)「哲学を純粹に保つこと」『哲学の脱構築—プラグマティズムの帰結—』御茶の水書房、一九八五年。
- (7) Henry Staten, *Wittgenstein and Derrida* (Lincoln: The University of Nebraska Press, 1984). (クンリー・ステーン(高橋哲哉訳)『ウイトゲンシュタインとデリダ』産業図書、一九八七年。)
- (8) 『探究』第一一六節におけるウイトゲンシュタイン自身による批判参照。
- (9) 「解明」については次の拙論において論じた。「教育・他者・超越—語りえぬものを伝えることをめぐって—」『教育哲学研究』第八四号、二〇〇一年。
- (10) 永井均『ウイトゲンシュタイン入門』筑摩書房、

- 一九九五年、七四頁。
- (11) ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン(杖下隆英訳)『フ
レーザー』『金枝篇』について』『ウィトゲンシュタイン全
集6』大修館書店、一九七五年。
- (12) たとえば、William Warren Bartley, III, *Wittgenstein, 2nd
ed.* (LaSalle, Ill.: Open Court, 1985); 今井康雄「情報
化時代の力の行方—ウィトゲンシュタインの後期哲学
を手がかりとして—」『教育学研究』第七三巻第二号、
二〇〇六年；Beth Savickey, *Wittgenstein's Art of Investi-
gation* (London: Routledge, 1999).
- (13) D・A・T・ガスキング、A・C・ジャクソン(成田
英明訳)「教師ウィトゲンシュタイン」『エビステマー』
第二巻第九号、朝日出版社、一九七六年十月。
- (14) S. Stephen Hilmy, *The Later Wittgenstein: The Emergence
of a New Philosophical Method* (London: Blackwell, 1987),
p. 5より引用。もともとこの出典は手稿番号MS一八九の
一九三七年十月三日付。
- (15) G. E. M. Anscombe, "On the Form of Wittgenstein's
Writing," Raymond Klibansky (ed.), *Contemporary
Philosophy III: Metaphysics, Phenomenology, language and
Structure* (Florence: La Nuova Italia Editrice, 1969).
- (16) Jane Heal, "Wittgenstein and Dialogue," Timothy Smiley
(ed.), *Philosophical Dialogues: Plato, Hume, Wittgenstein*
(Oxford: Oxford University Press, 1995), p. 72.
- (17) ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン(丘沢静也訳)『反
哲学的断章—文化と価値』青土社、一九九九年、一一二頁。
(広島大学)

Conceptual Captivity and Emancipation: Wittgenstein's Teaching of Philosophy

Yasushi Maruyama
Hiroshima University
Associate Professor

It is said that Ludwig Wittgenstein is one of the most important linguistic philosophers in the twentieth century. Indeed, his contribution to the "Linguistic Turn" is prominent. His interest, however, is not in language itself but in the emancipation of his students and readers from pictures that have held them captive. The purpose of this paper is to understand the point of Wittgenstein's philosophy by considering how he frees them in teaching philosophy.

The paper firstly argues that Wittgenstein's philosophy is likely to be misunderstood even by major Wittgensteinian scholars, and that his philosophy should be characterized as edifying philosophy, one that Richard Rorty distinguishes from systematic philosophy.

The paper then discusses the purpose of Wittgenstein's philosophy and his philosophical methods. While he held a consistent concept of philosophy from the early to the later periods, he changed his view on philosophical methods. The paper finds a connection between two periods by elaborating on the "elucidating" function of his philosophy, and his idea of an "overview" as a philosophical technique. It shows that Wittgenstein's philosophy is motivated by his pedagogical concerns about the emancipation of his students and readers from their conceptual captivity that causes philosophical confusions.

Finally this paper examines closely Wittgenstein's practice of teaching philosophy. It reconstructs his teaching in his class by using his students' memoirs, and analyses his *Philosophical Investigations* in terms of the idea of teaching as a philosophical technique of emancipation. His teaching in the classroom and his writings have some common features such as a dialogical style, presenting imaginary examples one after another, and encouraging students or readers to think by themselves. It is concluded that readers of Wittgenstein are expected to see beyond his teaching by learning from him how to emancipate themselves.